

【乳幼児期の危機、そして生き延びる力】 (1983)

Joan Cornwell

〔原題; Crisis and Survival in Infancy〕

Mrs.ビックが語るところに拠りますと、原初的な心の状態 a primitive state of mind には‘内なるスペース internal space’という感覚がまるでありません。それがために、その個がパーソナリティの己れのバラバラの部分をしっかり一つに纏めて抱えるには、身体的な皮膚と同等視されるところの‘脆弱な心的皮膚 a fragile psychic skin’といった外付けの手段を用い、それで辛うじて可能になるということになります。こうした心の状況において、赤ちゃんはその‘皮膚’の裂け目を通して己れが外へと漏れてゆくような危険に絶えず晒されていると感じているのです。こうした漏れ出る spilling out といった感覚は、己れ自身が溶解し、かつ喪失すること、どこでもない虚空へ流出し、無に帰すこととして体験されるものと考えられましょう。これは乳児の場合ですと、投影的及び摂り入れ的心的メカニズムが活用されるようになる以前の状態ではありますが、その後にも何らかのストレスが嵩じますと、そうした状態に逆戻りすることがあるわけです。その例の一つとして、最初の赤ちゃんの出産後多かれ少なかれその程度は異なるにしても概してどの母親の身にも経験されるということが挙げられます。

子どもの出産は母親に突然の尋常ならざるアイデンティティの喪失を惹き起こします。彼女はその出産前ともはや同じ女性ではありません。彼女は自分が誰なのかを知りません。それというもまだ母親としての新しいアイデンティティを獲得していないからであります。彼女の戸惑い、その喪失の痛みからやがて目の前の生きている無防備な赤ちゃんに対して己れが全面的な責任を担っているという理解へと至るわけです。内心ではまったくどうしたものやら自信がないと感じながらも…。彼女自身が新生児とまるでそっくりのように感じられるわけです。突如として脆くも傷つきやすく、丸裸で晒され、己れを抱えられずにいるといったふうに…。

父親もまた、こうした‘おとなのアイデンティティ adult identity’の喪失を経験することになります。彼は自分が抱え込めないほどの事態に直面して、まるで迷子になった幼子のように感じるかも知れません。彼の妻もまた、彼にしてみれば消失してしまったように感じるかも知れません。彼女の注意がすべて赤ちゃんに、もしくは彼女自身の心の動揺に、まったくのところ掛かりつきりといったふうに見えるからであります。又こんな具合に、最初に誕生した子どもにしても、次の赤ちゃんの訪れによってそのアイデンティティが突き崩されることになりましょう。明らかにもはや赤ちゃんではない、そして大人でもありませんわけで、それで自分の立ち位置も定かではなく、確たるアイデンティティもないわけですから…。

Mrs.ビックは、その論文『早期の対象関係における‘皮膚’の経験』の中で、赤ちゃんは、母親と一緒に居てくれている not available 場合ですと、つまり身体が統合されていない状態にあるということになりますが、それでもしもギャップ(隙間/gap)でもあれば漏れ出すこともあり得るため、極力切れ間

のない皮膚 continuous skin と同等視される場所の状況を敢えてこしらえることで自らをしっかりと抱えようとして懸命になる、といったことを詳細に語っておられます。そうした状況には感覚的な刺激に赤ちゃんの注意力が焦点づけられるといったことが含まれます。例えば光とか音ですが・・・もしくは絶え間なく身体を揺るといった動きとか、或いは身体的な表面を他の何かの表面へとくっつけ、それらの二つの間に何ら隙間がないようにぴったりと並置させるといったことも含まれましょう。

母親が赤ちゃんと一緒に居てくれる available とき、彼女はそのお乳を与えるオツパイ、その声音、膝、それに彼女の気配り attention と受容する力 receptivity でもって赤ちゃんにまさにこうした抱えてあげること holding を提供します。母親が身体的な意味でも、かつメンタルな意味でもですが、赤ちゃんと一緒に居てあげられずにいる unavailable 場合ですと、赤ちゃんは付着的な adhesive もしくは途切れのない状態に固執するといった防衛 continuity defences に頼らざるを得ないことになりましょう。相対的に不十分なマザリング、すなわちその時点で赤ちゃんは母親がそうしてあげられる以上に抱えられることを必要としているということなのですが、そうした状況に直面すると、そのような防衛が肥大化する傾向にあります。そしてこの肥大化は擬似・自立的な、‘二次的皮膚 second-skin’ の形成を促進させることになるわけでありませう。

Mrs. ビックは、乳幼児観察セミナーの場で、赤ちゃんの誕生で惹き起こされた家庭内の情動的インパクトについて、さらにはその新たな状況に馴染もうとして家族それぞれが四苦八苦するといった心的葛藤についても実に生き生きと語っておいでで、実に啓蒙的でありました。赤ちゃんは母親との間にその関係性をどのように発展させてゆくか、そして母親が不在である場合には、それ自らが、何らかの危機的状況に直面した瞬間においても、すなわち漏れ出してしまう spilling out といった意味合いですが、それに備えてどうにか生き延びようと決意し(the baby's determination to survive)、それがため新しいスキルを必死に身に付けようとするさまなどをも縷々彼女は語っておられました。

さて、ここで乳幼児観察の資料からその抜粋を3つほどご紹介いたしましょう。それらから、新しい赤ちゃんの登場が母親にそして最初に産まれた男の子(彼女の息子)にどのような影響をもたらしたか、そして三人三様にこの新しい事態に適応せんとどのように各自銘々が努力したか、その形跡を辿ることができましょう。最初にご覧いただく資料は、2回に亘って継続された観察であります。一つ目は赤ちゃんが誕生する10日前、そしてもう一つ次のは娘・エミリーの誕生後18日目であります。ここにおいて、2番目の赤ちゃんの誕生の頃、最初の子どもに‘心的皮膚 psychic skin の喪失’がどのように体験されていたのか、それが例証されているように思われます。

第一子として産まれた男児のロビーは生後20ヶ月目です。彼は母親の傍らに居ましたが、観察者と彼女とが話をし始めますと、母親のところへやってきて、飲み物を欲しがります。彼は2つのコップを両方の手に持って、それに飲み物をついでくれるようにと彼女に頼み、それぞれ両方のコップから飲み物を飲みます。母親は、彼が近頃なにかというよく飲みたがるようになったということを語ります。

もう一つの変化というのは、今や彼はベッドで毛布を掛けてもらいたがるということでした。以前ですと、彼はむしろカヴァーなしに寝るのが好きだったのです。母親が話をしている最中、ロビーは鍵を持ってきて彼女に手渡します。彼は妙にそわそわして落ち着きません。彼女はこの鍵がオモチャの動物 toy animal のものであることを説明し、それがどこにあるかを彼に伝えてあげます。彼はやがてそれを取って来て、それをバラバラにしてしまいます。それからそれらバラバラになったのを母親に手渡して、元通りにしてと頼みました。彼はそれからそれを観察者に持っていきます。彼女の乳房に触れ、彼女の着ている服のボタンを指差します。彼は母親へと戻ります。自分の頭を彼女のお腹へと押し付けます。入浴時には機嫌よくしていたのですが、彼はバスタブから出されそうになりますと大泣きをし、お湯の中へもう一度戻りたがって必死に抵抗します。母親が彼のからだを拭いてやりますと、彼女の服にしがみつ、彼女の首の回りに腕をきつくからませます。彼はそれからしばらく心ここにあらずといったふうで落ち着きませんでしたが、母親が彼の耳元に何やら囁きますと、再び顔に笑みが浮かびました。

どうやら彼は母親のからだの変化に気づいているようでありました。彼女はお腹の中に赤ちゃんを宿しているのです。そして彼はかつて安全に感じたところのその内側へまた戻りたいと思っていたのです。母親のからだの変化は‘喪失’と見做され、離乳時の‘喪失体験’が改めて繰り返されることになりました。だから、彼は飲み物をたくさん飲みたがったのですし、それも2つものカップから飲んだり、それに彼のボタン(乳首)へのこだわりからしてもそれが覗われます。就寝時に彼が毛布で覆われたいとむしろ思うようになったのは、彼の傷つきやすさと関連しているでしょうし、もはや母親の内側の安全な場所にいるのでも、もしくは彼女のこころの内側にいるのでもなくなってしまったというわけなのです。それで彼を保護してくれる‘ベッドカヴァー・皮膚 the bedcover-skin’が必要だったということになりましょう。特に夜間、彼が真っ暗闇の中にたった独りであるときなどがそうであります。

母親と一緒に安全な場所から排斥されてしまったという不安感はまだ、オモチャの動物を失うことへの不安感にも表われております。彼がその動物を見つけたとき、彼はそれをバラバラにしてしまいましたし、それから母親にまた元通りにしてと頼んでおります。母親にもはやしっかりと抱きかかえられていないとしたら、自分はバラバラになっちゃうのではないかと恐れているようでした。お風呂は明らかに母親を象徴しております。その内側は彼が自由に憩える安全な場所なのです。だから風呂から出されてしまうことは手酷い衝撃 traumatic ともなるわけです。そこで彼は母親にひしとしがみつきました。彼女と渾然一体になることだけが彼にとっての安全 safety といったふうであります。彼一人ではどう自分を護るべきか術がありません。彼をしっかりと抱えることのできる皮膚がありません。それで母親が彼の耳に何ごとかを囁いたときに彼の注意力は戻り、泣き喚きが止んだということになりましょう。

私が2回目の観察に訪れたのは、娘のエミリーの誕生後18日目でありました。母親は、お天気が良ければ乳母車で外を散歩できるのに、ここずうっとじめじめとしたお天気で外へ出ることもままならず、それでロビーがひどく気落ちしていると語りました。彼はすぐさま乳母車に‘穴’が一個あるのを見つけて、それを指し示します。母親は、どうも近頃ロビーが‘穴’に頻りに関心を向けるということを語りました。

この後に、彼が入浴している間ですが、膝の擦り傷を指し示し、ひどく不安げにこれみよがしの声音で、<ほらね、ものすご〜く痛いの>と言います。母親は知らなかったと言いました。からだのあちこちに打ち傷をつけることがあったようです。最近では大して痛がることはないにしても…。そもそも、母親が子どもを産むのに産科病院に入院している最中、彼が祖父母の家に預けられていたときに起きたとのことでした。その折に彼はタイヤの外れた古びた車を見掛けて、<痛い痛いの車 (sore car) だね…>と言ったんだそうです。一見してそれは彼に強い印象を与えたようであります。

この「タイヤの無い車」には、愛する母親からの初めての分離がこの小さな男の子にとって彼という存在の基底となるべきものの辛い喪失であった事実が鮮やかに例証されております。彼の幼い自己にとって、母親の喪失は彼をしっかりと抱えてくれる乳房の喪失ともいえましょう。乳房の変わりに、その接触点は‘穴’と化し、それと一緒に置き去りにされたというわけですから、それは痛い思い *soreness* を意味したに違いありません。だからこそ、彼は穴やら切り傷にひどくこだわったわけなのです。それ以前は安心感にすっぽりと抱かれていたのに、つまりは<お母さんはここにいるよ。ぼく、お母さんの赤ちゃんだもん…>といったことですが、それが今や身を悶えんばかりの不安感、何がどうなっているのか分からないという不確かさに覆われてしまっております。それで反復的にそれら痛みを伴う変化を惹き起こした喪失を繰り返すことを彼に動機づけたというわけです。そうすることで何かが変わるかもしれない、或いは少なくともそれで不安感がちょっとでも拭かれるといったふうに、いずれにしても予期しえぬといった要素 *the element of unexpectedness* を取り除くためなのです。こうした喪失は、自分は大丈夫だといった *well-being* 感覚をその根底から突き崩し、それで彼をとんでもなく傷つきやすく、危なっかしくも絶望の淵へと追いやったかのようであります。

ロビーはそれから扉を開けて、<バイ、バイ>と言います。部屋の外へと出てはみたものの、何度か引き返して頭を突き出し、クスクス笑いしながら、<バイ、バイ>と言いました。それから彼は部屋へと急いで駆け戻ってきて、躓いて転びます。そこで泣き声をあげ、そして母親に慰めてもらいに近寄ります。この時点で彼女は、ロビーがウンチをしたみたいだわと言います。

こうした《イナイナイバー》のゲームで彼は、彼から去っていなくなるのは彼女ではなく、むしろ彼女から去っていなくなるのは自分なのだということを物語っていたのです。彼は去られてしまう人ではないことが嬉しいのです。しかしながら、その直後に躓いて転んだのは、このことが‘嘘’だということを証しています。彼こそが何ら支えなしに置き去りにされたのだということになります。それと同じ瞬間に彼がウンチをしたのは、彼から去ってなくなった母親にもはや抱えられていないせいで、体の中のものが漏れ出ってしまったといったことのさらなる証拠として見做すこともできましょう。この折、入浴を終えて風呂から出されるとき、いつもなら泣くのに彼は泣きませんでした。この時点で彼はむしろ‘大きなジャンプ’をするのに気を奪われておりました。母親がバスタブから彼を両手で持ち上げたとき、勢いよくジャンプして出たといったしぐさをして見せたわけです。これもまた、安心して憩うお風呂から引っ張られ退けられるのでなくて、むしろ自分の方からそこを出ることを選ぶことで分離体験を積極的に克服しようとした例と

見做していいでしょう。彼はヨーグルトを食べているとき、自分でスプーンを使って食べていましたが、その度に殆どをスプーンからこぼしてしまうのでした。これは赤ちゃんの誕生以前に観察されたときとは対照的です。彼は食べ物をこぼすということではなくて、きちんと一人で食べられたのですから。これは再び、彼のメンタルかつ身体的な不安定さを物語っております。彼はもはや自分がしっかりと抱えてもらえないと感じており、そこで何もかもがすべて漏れ出てしまいがちであったわけです。

入浴中に彼は、石鹸を置くゴム製の吸盤 rubber suction pad と遊ぶことができました。それはバスタブにくっついていただけですが、手をその上に押し付け、そしてそこに手当たり次第に入浴時の玩具類をもくっつけようとしています。それからそれを手の中に握って、口へと持ってゆきます。そしてその次には、鏡と遊びました。お湯の中から鏡を持ち上げ、彼の顔がそこに映るのを見て大喜びをします。母親が彼に泡を吹きかけたときには、彼は両手を後ろへと回し、それらの泡が顔の上に流れ、そこで弾けてしまうのを眺めています。その瞬間彼は自分の手をそのようにしたのは、泡を敢えて壊さないためのようでした。たぶん丸いオッパイがやさしく彼の方へとやってくるといった感じを抱いていたのでしょう。再びここで彼はバスタブから出ることに動揺を来たし、大泣きをしました。彼はちょっとの間、鏡に自分の顔が映っているのを見て、静かになりました。安心して憩える風呂から出なくてはならないのでしばし戸惑っていたのですが、自分の顔を再び見ることでなんとか気持ちが慰められ、穏やかになったというわけです。

彼が己れをくっつけていられる何か、もしくは誰かを見つけ、それで是が非でも安心を感じようと躍起になっていることは、「石鹸置き」にひどく気が奪われていたことにも反映されております。自らの手をそれに強く押し付けてくっつけようとし、玩具をもそれにくっつけようとし、さらにはそれを口の中へと欲しがったのでありますが、ここにおそらく授乳するオッパイの乳首に猛烈にくっきたいという彼の思いが覗かれます。それは今や新参者であるところの赤ちゃんに横取りされてしまったのを彼は見てるわけですが…。

この訪問2回目の観察素材から、母親のそして赤ちゃん双方の‘漏れ出してしまう’といった経験やら、そしてまた彼らがそれにどのように対処せんと懸命となったかということが、また母親そして赤ちゃんの相互作用がどのようにそれぞれの動揺を緩和したか、もしくは激化させたかということも実によく覗われまします。息子の方の世界が赤ちゃんの誕生でもって急速に変わろうとしているちょうどそのとき、母親の世界もまた変わってゆきました。まさにロビーが観察したとおり、彼の妊娠している母親はすでに彼がそれまで見慣れていた母親とは違っておりました。母親に最初に会ったとき、< 凄いスツァモンダ chaos なの、ご覧になって > と言いました。それからその後でも、< まあまあ、このメチャクチャな有り様 mess を見てちょうだい > と言いました。彼女は、ロビーの遊ぶスペースと玩具類を一つの部屋に限り、それで他の部屋はどうか綺麗なお状態にしておこうとしてるんだけど・・・とも語っております。妊娠している母親は子どもを出産するということがいかなるものかかなりの不安を覚えるものであります。それらの不安感の一つは、モノが片付かなくて部屋中がメチャクチャになったり、何もかもが乱雑極まりないスツァモンダの状態となり、それで日々大いに心悩まされるといったことであります。彼女は殊に、自分の内側にあるものが何であるかを予め掌握し得ないことが不安なのです。そこで彼女は、物理的に目に見える乱雑

さ mess を一つの部屋に制限することでなんとかそうした不安感を制御下におこうとしたわけなのです。

母親と息子との関係はとても親密でかつ繊細で、滅多に途切れることのない、持続的ともいえる接触が保たれておりました。彼はこれまであまりにも長くすべてを一人占めできていたので、新しい赤ちゃんの誕生に慣れるのは大変だろうということを母親は語っておりました。彼女と観察者とが話している最中、観察者の足をロビーが板で叩いたのに気づき、それでくママを誰かと分かち合うというのに慣れていないせいだわね…>と語っております。母親もまた、新しい赤ちゃんにどう対処すべきかと不安でもあったのです。二人とも大声で喚いて彼女を求めましょうし…。彼女はロビーに折々、特に動揺を来たしたようなとき、耳元で囁くようにし始めました。それは彼の気を紛らせ、そして喜ばせたのですが、将来彼が注目を得ようとしてカナキリ声を上げることをさせないようという彼女の意図でもありました。

この訪問2回目の観察では、母親はおよそひっきりなしにお喋りしております。その前の観察時からどんなことが起きたのかと表情豊かに仔細を語ってくれました。新しい赤ちゃんの誕生時のこと、最初の授乳、そして帰宅、それらをこと細かく語ってくれました。彼女は、息子が彼女の不在を全然淋しがらなかったみたいだと語りました。むしろ彼女自身が彼を恋しがり、彼が彼女をすっかり忘れてしまったとか、まるで変わってしまったといったふうな夢を見たんだとか。彼女は彼に見捨てられたと感じたのです。まるで穴が開いたみたいに…。それはそっくりそのまま彼が感じたことでもあります。彼が再び彼女を目にした瞬間に、大きな微笑を浮かべ、<ママー！>と叫ぶのを耳にした時、彼女は束の間の慰めを得たのであります。彼女は赤ちゃんとの関係性の中に出来る限り彼をも入れてあげようと心掛けました。そんなふうには、彼を疎外されているふうには感じさせまいとしたのですが、同時に赤ちゃんをオツパイで授乳している最中にロビーがやって来て彼女の頭を叩いたりしないようにと気をつけなくてはなりません。こうして一人の子どもからもう一人の子どもへと心が引き裂かれることは母親にはとても神経のまいることであります。赤ちゃんに寄り添っている間も、ロビーの皮膚がエミリーのと比べてどんなにかタフで、そして彼女と比べて彼がどんなに大きいかを語ることで、だからロビーは万事大丈夫だと、母親自身己れの不安を宥めねばなりません。ロビーが彼女に訴えたところの切り傷の件は忘れられておりました。

訪問3回目の観察時に赤ちゃんは風邪を引いておりました。それは上の男の子から感染したのであります。母親は彼が赤ちゃんの上に屈んで息をしていることに気づいてはいたものの、彼を彼女に近付かないように遠ざけることは出来そうにないと思ったのです。母親が2人の子どものうちのどちらを守るべきか決断しきれず、それで行動を起こせずにいたこととなります。こうして接触点 the point of contact が見失われたとき、母親はしっかりと気を静めて思考し、行為することが出来ません。彼女は制限を設けることをせず、事態をあるがままに放置したということとなります。以前ですと彼女は‘スツタモンダ mess’を一つの部屋にまとめておくことで片付けが出来ていたのですが、今や心理的に申しても、見るからにモノがあちこちに氾濫しており、彼女はすっかり圧倒されてしまっていたと言えます。彼女は境界がない(no boundaries)と感じ、まったくのところ事態をうまく抱え切れずない(no holding)とも感

じていました。従って、彼女は秩序を回復することに大いに悲観的になっていて、それで頭を抱えていたということになります。彼女はとても罪悪感を抱いていて、事態に直面することが難しいようで、それで風邪を引いていた赤ちゃんの方は、ロビーがベッドへと連れてゆかれた後、観察の終わり頃にほんのちよつだけ見させてもらえただけというわけなのでした。翌週のこの次の観察時のことですが、赤ちゃんにお乳をふくませながら、母親はこんなふうに語っております。<この年齢の赤ちゃんって、ただ食べて眠るだけで、あまり周りに関心がなさそうだなね。どうやら記憶というのも全然ありはしないみたい。心は空っぽで、耳に何かしら聞えるということはあっても、音には全然かまわないみたいだわ>と。。エミリーは、お兄ちゃんの立てる雑音には全然動じません。

こうした事柄をこの母親から伺うのは意外に思われ驚きました。この当時母親は迫害的な罪障感に対してとても傷つきやすくなっており、それで赤ちゃんが感じたり、それで苦しんだりすることを否認せざるを得なかったということなのでしょう。しかしながら、授乳はなんとかうまくいっておりましたし、赤ちゃんは満足げにも見えましたし、ゲップの方もとてもスムーズでしたから、母親は喜んでいて、それで母乳を与えることがとても楽だということ、それがどれほど嬉しいことか、だからいろんな事情があつて母乳を与えることの出来ないお母さん方にはお気の毒だという話もしております。この年齢の赤ちゃんはとても大きくなるのが早く、だから母親たちがたくさんたくさん赤ちゃんを欲しがるとも無理はないというわけです。ここに至って、自分が母親として失格だとか、つい先頃悩まされていた罪悪感などもすっかり忘れ去られて、スツタモンダの片付かない思いは遠くへと追いやられてしまっておりました。

最初の頃から赤ちゃんは吸い付きのとてもよい子で、お乳をよく飲むのは明らかでした。コットの中で目覚めている折も、彼女の口は吸う動作をしているのがよく見られました。母親が彼女の頬を撫でますと、赤ちゃんはすぐさま彼女の指を口へと咥え、そして吸うのです。オッパイを与えられますと、彼女はすばやく乳首を見つけ、すぐに勢いよく吸い始めます。しばらくして吸うのを止め、しかし口先を乳首の周りをくっつけてモゴモゴさせております。つまり彼女の口のどこかが乳首のどこかに触れているといった具合です。言い換えれば、彼女は乳首にしがみついているわけではないものの、それを手放しもしないといった感じです。目覚めかけたときに彼女はその舌を口から出したり引っ込めたりするのがしばしば観察されておりますが、それに類似したものと考えられます。おそらくは分離 *separateness* という考えが芽ばえているのでしょう。しかしそれらは継続した一連の動きであり、実際にそこにはスペース(隙間・距離)の感覚はまだありません。また乳首を大事に撫でているといったふうでもあります。授乳の際、エミリーはいかにも満足げに高い調子のウワーツと唸るような声を出すことがありました。彼女はとても母親のオッパイを嬉しがっているといった感じなのです。そうでありますから尚更に、母親は赤ちゃんの満足によって‘マザリングの能力’に安心を覚え、それでいっそう優しさが喚起されたものと思われれます。母親はまた、エミリーがゲップをいとも簡単にできるので安堵しているようすでした。つまりは赤ちゃんがとてもリラックスしているということを感じていると感じたからですが。。

赤ちゃんはうつ伏せの恰好で眠っておりました。ところが仰(あお)向きにされると、目に見える変化

があります。彼女は泣き出し、腕を前後に大きく伸ばし、顔やら足へと向けながら無闇にバタバタと振り回すのでした。彼女の手はニギニギしたり、開いたりをしております。彼女はまた脚やら足先をも動かし、母親に抱き上げられるまでは忙しくなく、動きが止まりません。仰(あお)向けにされていますと、どうやらしっかり抱えられていないと感じるらしく、‘広場恐怖症 agoraphobic’ ぎみになるのでしょう。その一方でうつ伏せにされますと、彼女はマットレスと一体 at one になって、母親の上にもたれかかっているみたいに感じるようでした。バタバタと絶え間なく持続的にからだを動かしていた continuous movement のは自らをしっかりと一つに抱えようとしていたことになりましょう。すなわちこの場合の持続性 continuity には、‘皮膚・コンテナー skin-container’ に何ら隙間がない(no gap)、そして何ら穴がない(no hole)ということ、だから漏れ出る spilling ことも起こりっこないといった意味が含まれていたわけであります。

6週間目になりますと赤ちゃんは違ってまいります。うつ伏せのままですと彼女は落ち着かず、緊張が弛みません。彼女の舌は彼女の口の中で動いてはいるものの、それを外へ突き出すということはありません。母親はエミリーがどうして落ち着かないのか、その理由が分かりません。不安に駆られて、彼女は赤ちゃんに何らかの動作を試みさせます。笑わせようしたり、頭をしっかりと支えて持ち上げたり、お座りをさせたりです。それもこれも赤ちゃんが万事うまく育っているという安心を得たいというわけでした、それで結局のところ自分がいい母親であるということが確かめられ安堵するということにもなりましょう。この時期、彼女は或るちょっとした緊張を抱えておりました。ロビーが夜間に目覚めてよく頭を振ってはガンガン叩きつけることをしますし、壁紙を剥がすといったことをもやり始めたからです。赤ちゃんはこの母親の緊張感を逸早く察知していたものといえます。母親がどうやらいつもと違ってしまっていて、この先どうなるのか不確実に感じられるといった具合でした。母親は、彼女が我知らずどうやらエミリーを驚かせてしまったようだと言いました。コットの下の方から近寄って、彼女を見下ろしたということでした。エミリーは一瞬ブルブルと身震いし、腕を前後に振り回したとのことです。この身震いは、赤ちゃんがゼル状になり、液化したといったことを表しており、突如として‘コンティンする皮膚 containing skin’ を失ったかのような体験と言えなくもありません。こうして赤ちゃんばかりではなく彼女自身をも驚かした事柄をあれこれ話した後、母親はまったく別のこと、つまり赤ちゃんの体重が増えたという話をしました。そして、どうしても二番目の子どもについては得てしてあまり頓着しないということも…。彼女はここで驚いたり怖がったりの経験を敢えて否認しなければならなかったのです。これと同じ観察日のことですが、赤ちゃんがオッパイを口にふくんでいるときにまたもや‘怖い経験’をするという事態が生じました。ロビーがすごい騒音を立てたため、赤ちゃんはそれでちょっと眉をひそめました。母親は怒って、ロビーを叱りつけます。彼は怒鳴り返し、その挙句に近付いてきて彼女と赤ちゃんとを手で叩くということがあったのです。

その翌週、母親はくなくとか生き延びられてるわ surviving>と語っております。でも実際のところロビーはまだよくは眠れずにいるとのことでした。そして赤ちゃんの日常のスケジュールも変更を余儀なくされることが多々ありました。規定の検査のためにあちこちのクリニックに出向かねばならなかったわけなのです。これらのクリニックで医者はエミリーの反射運動 reflexes を調べました。これらの反射機能について詳しく語りながら、母親はどうか罪悪感から免れて安堵を抱いたもようでした。赤ちゃんはすべて

反射レベルにおいて機能すると考えるとしたならば、すなわちすべてが反射であり、だから、彼女、母親には何ら責任はないのだといったことになるからです。

赤ちゃんが何らかの痛苦を訴えているとき、母親は自分が母親として失格であると感じてしまい、それで赤ちゃんの「感じる能力」を否認することでそれに対処しようとすることがありますし、もしくは赤ちゃんが体重を増したとか、或いは身体的動作のスキルを獲得したといった赤ちゃんのより満足的な発達の証拠をいちいち数え上げ自らを慰めたりするといったこともあるでしょう。そうしたパターンは、幼い赤ちゃんを持つ母親の観察では繰り返しよく見られることであります。迫害的な罪悪感といったフィーリングに耐えること、そしてベストを尽くそうと奮闘し続けてゆくことのどちらも至極難しいことなのであります。

このように赤ちゃんにはフィーリング(感情)はないといった‘否認’によってなんとか事態に対処せんとするには、母親の‘付着的なメカニズム adhesive mechanisms’への逆戻りということがあろうかと思われます。そこでは気持ちが圧倒され、彼女に出来ることといえば、赤ちゃんについての型に嵌った‘決まり文句 clichés’にしがみつくとでしかないわけです。そうしますと、彼女はもはや心の動揺を抱えきれず、さらにはそこから彼女自身の経験について、もしくは赤ちゃんの心の状態についても思念を巡らせるといったことが出来なくなってしまうでしょう。

この時期、ロビーはストレスの経験にもどうにか耐え、目に見えて成長してきました。彼は今や積極的に母親そして観察者ともコミュニケーションしますし、彼女らに言葉で、もしくはジェスチャーで何をしたいのかを告げることができます。以前の観察ですと、彼のフィーリングやら願望の表出というのは彼の遊びの中に覗かれることが多く、それも何か失うとか、いなくなるとか、倒れるとか、漏れ出すとか、それで救出されるといったテーマが主でありました。彼はここに至り、或る程度三者関係の中で自分が排除されるといった状況を回避することがどうにかうまく出来るようになってきました。それも敢えて母親と一緒にとかもしくは観察者と一緒といったふうに二者関係を作ることでなりましたが・・・彼は、観察者にどこに座るのかを指示し、それから絵本を持参してきて、それらのページの中の絵を見せて、それらの名前を言います。それから彼はそれを今度は母親にも同様にしてやりました。その後、入浴している最中のことでしたが、彼は泣きながらも、手に‘玩具の樽の中の赤ちゃん a toy baby-in-a-barrel’を持ち、それに口を付けて吸うことでどうにか自分で自分を落ち着かせようとしていました。こうした場合、以前ですと、母親の首の辺りに必死になってしがみつくとというのがいつもの彼流だったのですが・・・風呂から出されると彼はいつものように泣き声を張り上げました。しかしエミリーを見ながら、‘赤ちゃん’と言い、そして母親のオッパイを指し示したのです。明らかに何やら自分の心に思うことを彼なりにコミュニケーションしようと努めていたこととなります。この時点から彼の言葉は急速に進歩してゆきました。その次の観察では(赤ちゃんは6週目でしたが)、目立ってロビーが2つの言葉を繋げて話すのが認められます。母親が彼のベッドルームから立ち去った折に、彼は<ママはいなくなったね。赤ちゃんを取りに行くんだ(Mummy gone, get baby)>と言い、そして赤ちゃんがなにやら発話している音を耳にして、<ほらね、赤ちゃんがあっちにいるだろ。エミリーだよ(There baby, Emily)>と言いました。

赤ちゃんの誕生は、家族成員の誰にとっても、それぞれの誕生時における原初的な喪失 original loss 体験を再燃させるといえましょう。しかし誕生そのものにも似て、こうした喪失感はまだ生き延びんとする懸命な意志力 the struggle to survive を総動員させるとも言えなくもありません。それは例えば、‘防衛的なメカニズム’を援用し、それで心にスペースが出来て、それで一時的にせよ混沌(カオス)状態から免れ、安堵することであったり、もしくはそこに心的苦痛 pain を認め、そこからいっそうさらによりすぐれた理解力(知力)を得る努力をすることだったり、それらいずれにせよ。。

27 Daleham Gardens,
NW3, London

参考文献

Bick, E. (1968). The Experience of The Skin in Early Object—relations.
Int. J. Psycho—anal. 49, 484

※原典; Crisis and Survival in Infancy

by Joan Cornwell

Journal of Child Psychotherapy, 1983, Vol. 9
